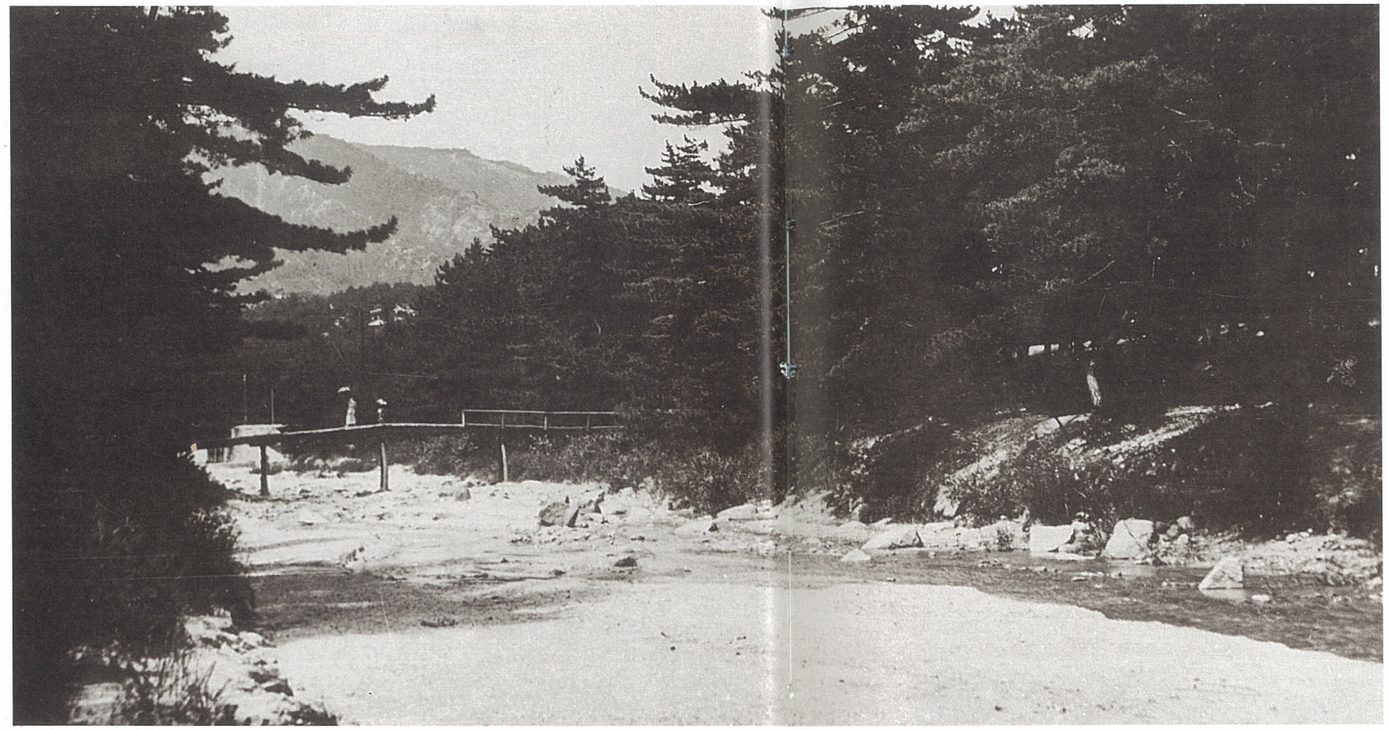
4 精道村風景

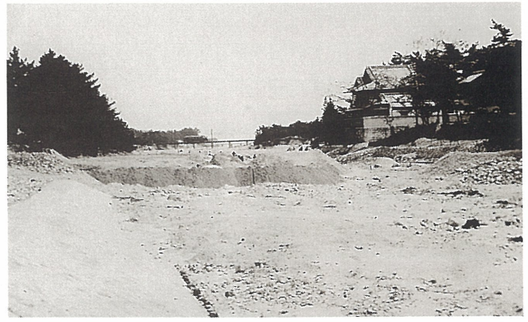
芦屋川

芦屋川は、川床が付近の低地より数メートル高く、砂礫(されき)の多い土壌で、農耕地としては恵まれず、明治以前は開発に大きな支障となっていました。しかし、近代都市の住宅地としてみると、土地は高くて湿気が少なく、地下水は清浄であり、堤防上の松の緑と地表水の織りなす風致は美しく、しばしば近代文学の名作の舞台ともなっています。



昭和初期の芦屋川風景　写真は昭和初期の月若橋(ベコベコ橋、どんどん橋ともいう)で、阪急電車が開通(大正9年)する前からあったが、幅が1メートルほどの舟の底板に似た木製だった。歩くたびにきしむ音からこのように呼ばれた。

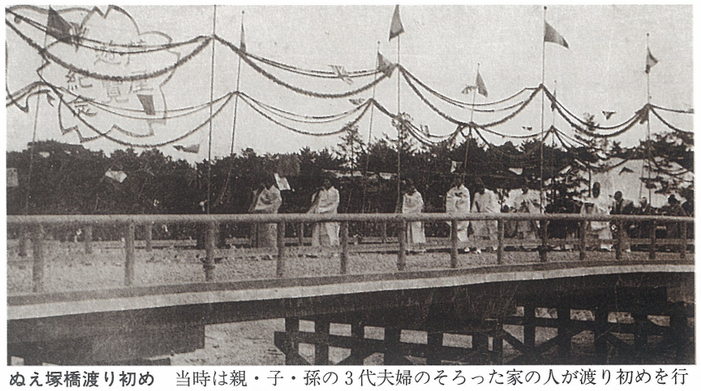
月若橋　芦屋の伝説・謡曲「藤栄」にみえる月若丸にちなむ。



大正初期の芦屋川　往時は川幅が100メートル以上もあった。

大正初期の芦屋川改修工事風景　この写真からも、川幅の広さがうかがえる。

大僧橋(左)と城山橋(右)　城山橋は、昭和13年の阪神大水害で流失し現在はない。



ぬえ塚橋渡り初め　当時は親・子・孫の3代夫婦のそろった家の人が渡り初めを行った(大正6年)。

芦屋浜

漢人の浜の伝承で知られた白砂青松の芦屋浜の情景は、万葉のむかしから都人のあこがれの地でした。近代には、多くの文人墨客が訪れています。

芦屋浜　大正時代

芦屋海岸　大正９年

芦屋浜で遊ぶ子どもたち　大正時代

芦屋浜のようす　大正時代

昭和11年ごろの芦屋海岸と防潮堤

芦屋浜の春　大正時代

芦屋の名所

大正時代の潮見桜　初代は在原業平が西山町の塩通山法恩寺内に植えたと伝えられている。写真は3代目の潮見桜で、明治6年開森橋西詰に植えつがれ、昭和初期まで芦屋の名木として知られた。

くろがねもちの木　西山町旧法恩寺にあった「くろがねもちの木」は、根回り約4.9メートル、地上1.5メートルの幹回り約3.5メートル、高さ20メートルで、くろがねもちの巨樹としては松江城のものとともに全国的に有名だった。昭和9年、兵庫県から天然記念物に指定されたが、老衰と害虫に侵され枯死した。33年4月天然記念物指定解除。

弁天岩付近の景観　六甲山中の巨石・巨木はしばしば信仰の対象にされ、近くのフカ切り岩の伝説とともに、水神の住み家と信じられ、雨乞いの霊場であった。

打出阿保親王墓　親王さんの森と呼ばれた阿保親王塚正面。左右の石灯篭は、山口県毛利家の寄進といわれている。

伝猿丸太夫之墓　芦屋神社境内には、猿丸太夫之墓と伝えられる宝塔がある。鎌倉時代の石造品とされているが刻銘はない。

芦屋神社風景　むかしから天神山のつつじで親しまれた芦屋神社は、阪神間屈指の名勝地で早くから阪神六景のひとつに選ばれていた。神社へ向かう参道周辺は、赤松の原生林やみかん畑などもあり、周囲の山や南への眺望にすぐれていた。

当時の風俗

打出西国街道のおもかげ　打出西国街道は、生きている道の歴史といわれている。京都からのコースは、西宮で西に向かい春日町に入った。道はここから金津山の南を通り、西国橋を渡り茶屋之町を直進して国道２号に出る本街道と、国道43号に沿う浜街道にわかれ、神戸市に入った。昭和43年ごろから始まった区画整理事業で、道幅も車道２車線と歩道がつくられ、鳴尾御影線の延長として大きく変容した。写真は、昭和53年に撮影したもので、旧打出西国街道のおもかげがしのばれる。

旧打出西国街道をしのばせる石造品
左　中山　　右　西宮道
左　甲山　　右　中山
　　荒神道　　妙見山
と刻まれた道標や、一石五輪塔・定印弥陀などの石造品。

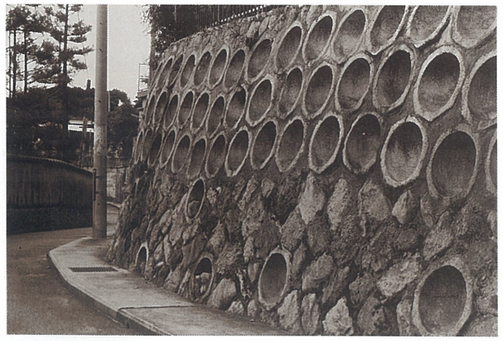
本通り商店街付近　本通り商店街は歴史も古く、明治時代の車道にそって位置し、阪神電車の開通などで発展してきた。大正12年ごろには「本通り商店街」の名称をとなえるようになった。写真は昭和12年ごろ。

寿劇場　大正10年、大桝町に赤レンガ造りのモダンな劇場（収容人員200人）ができ、芝居・映画などを上演してにぎわったが、昭和25年に火災で消失した。

芦屋仏教会館　祟信会を母体として、昭和２年６月現在の前田町に鉄筋コンクリート造３階建の仏教会館が落成し、５年３月に財団法人が設立された。付属事業として、10年祟信幼稚園を開園した。

阪神少年野球大会で優勝した精小チーム　昭和６年

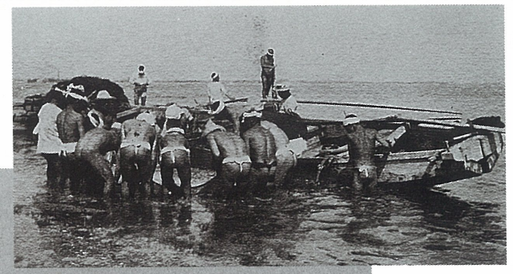
明治末期の農作業のようす



石垣に転用された水車臼　芦屋の水車産業が盛んだったころ、水車でつくった小麦粉を使ってそうめんづくりが行われていた。いまは、「そうめんづくり唄」や水車にまつわる悲恋物語「金兵衛ぐるま、焼けぐるま」の伝説、山芦屋の民家の石垣に残る100余の石臼などにその面影を伝えている。

城山山麓の水車　江戸時代から、芦屋川の急流を利用して、西芦屋、東芦屋、三条、打出などで、最盛期は十数台の水車が回り、精米や油搾りなどに利用されていた。緑とオゾンにつつまれた水車谷や城山の山麓、静かな田園風景のなかに水車が回る芦屋地方も、大正以後住宅地化が進み、水車の姿も見られなくなった。

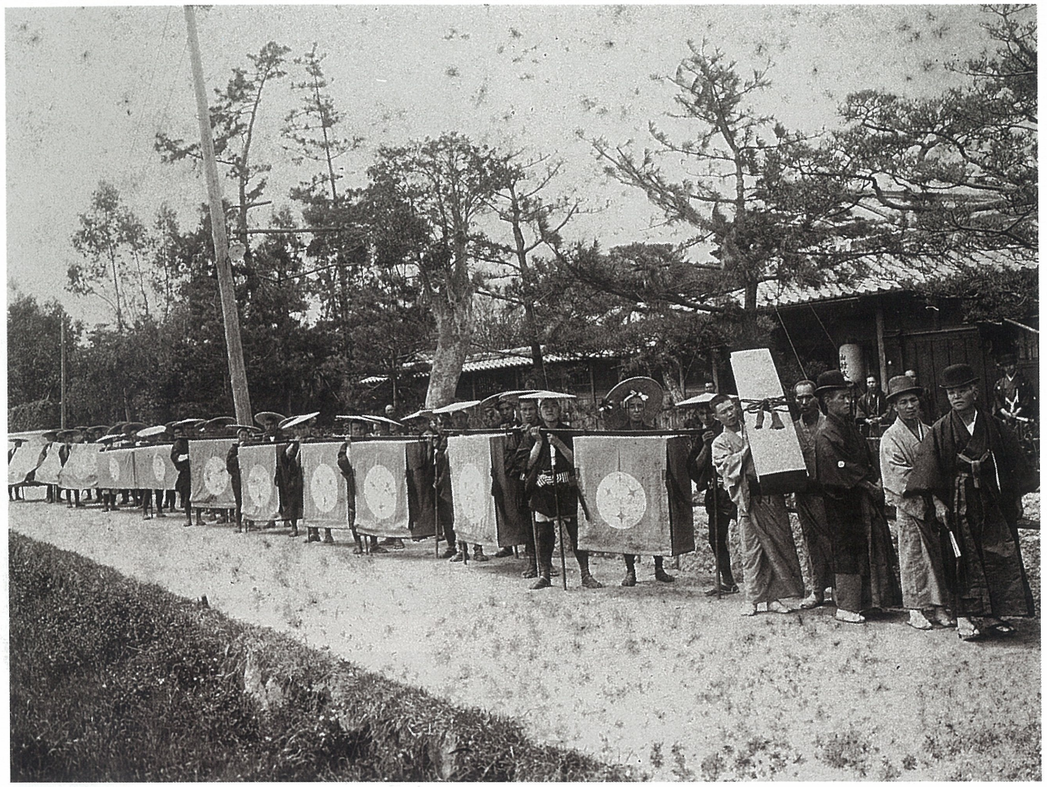
大正時代の芦屋浜いわし地引き網風景　「とれとれのいわし」で親しまれた地引網は、２隻の漁船が沖合に出て山形に分列進行して投網し、終われば岸に引き返し轆轤（ろくろ）を使って網を引き上げた。戦後昭和25年ごろになると、漁獲高の向上を図って船曳網へと漁法が変化し、芦屋浜から地引網は消えていった。



芦屋海岸漁獲の景　阪神沿線芦屋名所絵葉書から

巨石運搬のようす　明治時代
明治時代の鉄道敷設や駅舎建設のため、材質もよく安価であった芦屋地方の石材が多く利用された。

東洋牧場のようす　昭和初期
明治末期から昭和20年まで川西町にあった東洋牧場は、〝しぼりたての牛乳〟として親しまれ、大正年間乳牛約50頭を飼育し、年間搾乳量約300余石（約54,000リットル）をあげ灘地方に販売したが、戦災で焼失した。

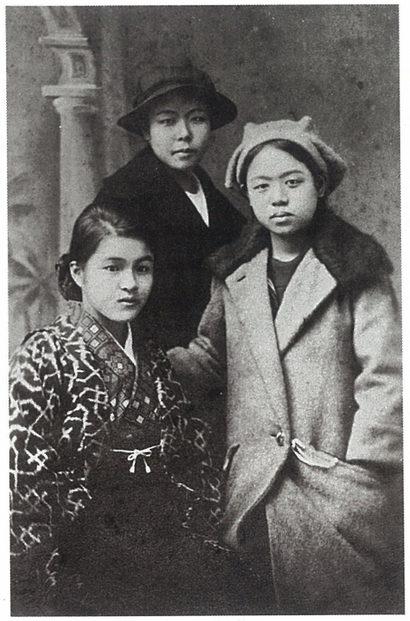


嫁入りのようす　写真は大正時代、現在の浜芦屋町付近での嫁入り風景。親戚や村の人びとの前で、盛大なお披露目とお祝いが行われた。10余荷の嫁入り道具がかつがれ、当時、荷を担ぐ人は「長持音頭」に合わせて「ヨーイショ」のかけ声で杖をたくみにあやつり、肩を入れかえて荷を運んだという。

嫁入りのようす　大正末期、現在の三条町付近での嫁入り風景。

嫁入り道具　お披露目で、部屋中に飾られた嫁入り衣装・家具など。

大正14年ごろの子どもの風俗



大正10年ごろの女学生の服装

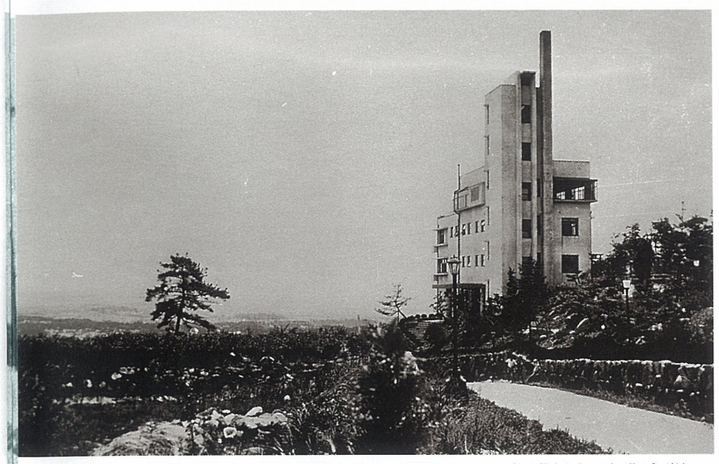
大正時代の女性の服装

西之町だんじり　戦前まで芦屋市内には、打出・三条・津知・山芦屋・西芦屋・茶屋芦屋・浜芦屋と８基のだんじりがあった。三条、津知のだんじりは、古くは保久良神社の氏子として、５月13・14日の祭りにだんじりを曳いていた。打出は10月17日の打出天神社の祭に、他の５基は10月15・16日の芦屋神社の祭に巡行が行われた。写真は、昭和８年10月芦屋天神社（現芦屋神社）秋祭りのようす。

大正時代中ごろの海水浴風景　関西で海水浴場が開設されたのは、打出浜が最初であった。明治39年、新聞社（大阪毎日新聞社）主催として紙上に打出海水浴場開設の社告が出たところ、南海電鉄が急拠大阪・浜寺に開設したといわれている。

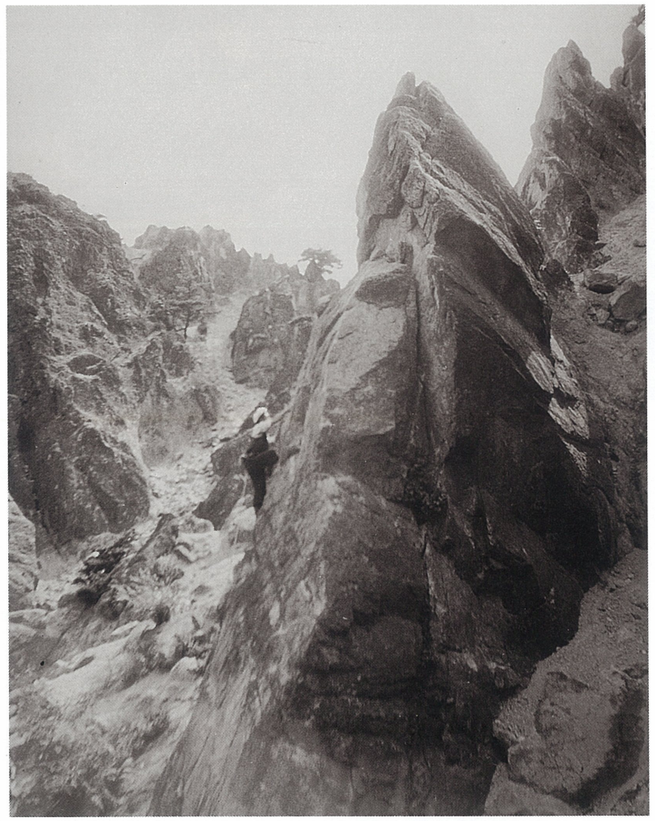
芦屋浜　昭和初期

芦屋浜海水浴場のスナップ　昭和12年



建設当時の六麓荘国際ホテル　国際ホテル（現芦屋女子短期大学）は、茅渟（ちぬ）の海を見下ろし、四季を通じて風光明媚、しかも芦屋駅から10数分の便利な立地ということで、昭和12年９月六麓荘に建設された。戦時中は、企業の研究室として使用されたりもしたが、戦後は米軍に接収され、外国人や一流財界人が泊まるホテルとして有名だった。

オープン当時のパンフレット



ロックガーデン　ロックガーデンは、芦屋川と魚屋道にはさまれ、南は、高座の滝付近より、北は、荒地山までの一帯の地域で、花崗岩が特異な奇岩の様相を呈し、岩登りのゲレンデとしてハイカラ好みの人たちに親しまれてきた。ロックガーデンの名称は、大正時代の登山家藤木九三などの紹介による。写真は昭和８年、イタリアンリッジ（高座川奥の滝付近）。

B懸垂岩　ザイルを使って降りることを懸垂と呼ぶことからその名がついた(昭和５年)。